

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 7 No. 1 June 2018

「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル」(PSNA):第3回会合

鈴木 達治郎

第3回PSNA会合は、2018年5月31日～6月1日の2日間、長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)主催、パグウォッシュ会議、ロシア科学アカデミー幹部会下パグウォッシュ会議、モスクワ国立国際関係大学(MGIMO大学)、世界経済国際関係プリマコフ国立研究所(IMEMO RAS)協力の下、モスクワで開催された。会議には、パネルメンバー11名(米国、ロシア、中国、韓国、日本、モンゴル、オーストラリア)にくわえ、地元ロシアの専門家と北朝鮮大使館からの参加者2名等、総勢57名の参加を得ることができた。会議プログラムは北東アジアの平和と安全保障に加え、核兵器国の核戦略見直しの必要性やミサイル防衛問題、核不拡散条約(NPT)と核兵器禁止条約、原子力安全性と核セキュリティ問題と、幅広く議論を行った。今回は、特に板門店宣言、米朝会談の可能性といった大きな情勢変化があったこと、さらに北朝鮮大使館より、参事官と一等書記官の2名が初めて参加したことで、北東アジアの非核化と平和構築への期待が高まった内容となった。

特に、北東アジア問題については、板門店宣言の評価として、北朝鮮の非核化ではなく、朝鮮半島の非核化と朝鮮戦争の終結を明確にしたこと、そして軍事対立を防ぐための信頼醸成措置の重要性が指摘された。ここから、さらには北東アジア全体の非核地帯化と北東アジア全体の安全保障の枠組み構築の重要性が強調された。また、過去の米朝交渉の教訓、さらにはイラン核合意の教訓などを踏まえ、性急な結果を求めたり、誤った判断に基づかないよう、交渉を慎重に、かつ忍耐強く行うことの重要性が指摘された。

何よりも、米朝会談の行方が今後の北東アジア情勢のカギを握っており、成功すれば北東アジアの平和と安全保障にとって、歴史的転換点となることは間違いないとの認識は共有された。したがって、今後はこの機会をとらえて、非核化のプロセスと安全保障の枠組み整備にむけて、堅実な議論を続けていかねばならない点が強調された。こういった指摘も受け、PSNAとしては、あらたに「非核化の検証」と「地域安全保障とグローバルな核軍縮・不拡散体制」の2つのワーキング・グループを立ち上げることで合意した。



会合に耳を傾ける北朝鮮大使館からの参加者
(2018年6月1日 場所:IMEMO RAS 撮影:RECNA)

今回の会合を受けて、PSNA共同議長による声明・提言が公表された。主な提言としては;1)今回の対話を生かして、法的拘束力をもった北東アジア全体の非核兵器地帯化をめざすべき 2)地域全体で安全保障対話を進める枠組みを構築すべき 3)2020年NPT再検討会議に向けて、核兵器禁止条約をめぐる対立を防ぐため、関係諸国は安全保障政策における核兵器の役割を減少させる施策を検討すべき 4)政府による外交の信頼性が問題視されている状況で、市民社会や専門家が政府の動きを監視し、よい方向に導く努力を強化すべき、5)特に日本は地域の重要な一国として、信頼醸成や北東アジア非核兵器地帯の設立にむけて積極的な貢献を果たすべき、である。

今後は、急変する北東アジア情勢に対応して、タイムリーにかつ有効な政策分析や提言を行うべく、「非核化の検証措置」と「地域安全保障とグローバルな核軍縮・不拡散体制」の2つのワーキング・グループを設置し、専門家による「ワーキング・ペーパー」を発行していくことで合意した。PSNA自体の会合は2020年に開催することとなった。

<第3回PSNA共同議長声明と提言>

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/bd/files/3rd_PSNA_Statement_J_20180601.pdf

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

ナガサキ・ユース代表団

2020年NPT再検討会議第2回準備委員会

長崎県、長崎市、長崎大学が認定する「ナガサキ・ユース代表団」第6期生8名が、4月23日～5月4日にスイス・ジュネーブで開催された「2020年核不拡散条約(NPT)再検討会議・第2回準備委員会」に参加しました。現地では、国連内の自主ワークショップの開催や、各国政府・NGO関係者との意見交換、日本人学校での出前講座実施などを精力的に行ってきました。本紙では、中島、永江2名のレポートをお届けします。



ナガサキ・ユース代表団第6期生
(左より、工藤、酒井、孫、福井、原田、永江、三浦、中島)
(場所:ジュネーブ国連敷地内 写真:PCU-NC提供)

NPT準備委員会を傍聴して

ナガサキ・ユース代表団第6期生 中島大樹

2020NPT再検討会議第2回準備委員会に出席し、そこでの活動を通じて、私はこの会議の持つ意味について感じるがありました。RECNAのNPT BLOGでも書かれているように、今回の会議においては特に何の進展も見られず、私自身も特に核廃絶への意味を見出すことは出来ませんでした。

初日からアメリカとロシアがシリアの化学兵器の問題についての応酬を繰り広げ、NPTについては語らずじまい。核兵器国と非核兵器国の議論も全くかみ合わず、ただただ溝が深まるばかりでした。

核兵器禁止条約に関して、現在58の署名がある内、批准は10のみ。もちろん、物事はそう簡単には動きませんが、これらの背景には日本もアメリカの圧力を受けているように、アフリカ諸国もまたヨーロッパ諸国の圧力を受けているという事実があります。逆に言えば、圧力を受ける側がいるのも事実、それに屈する側がいるのも事実ということです。

このグローバル化の世界の中で他国と完全に切り離して生きるの難いでしょう。しかし、それは国家の防衛でもそうなの

被爆体験の継承

ナガサキ・ユース代表団第6期生 永江早紀

今回、初めてNPT再検討会議準備委員会に参加しました。国際会議への参加自体が人生初めてである私にとって、そこで出会う人々、話されている議題、会議の雰囲気など全てが新鮮でした。

私は、国連内で行われるサイドイベントでプレゼンテーションを行いました。ナガサキ・ユース代表団として活動をしていく中で気づいたことは、被爆の歴史が国を超えて継承されていな

でしょうか。

今回、私達ナガサキ・ユースはサイドイベントを実施し、73年前の原爆はヒロシマやナガサキに落とされたのではなく、「人類」に落とされたのだと語りました。国の状況は違えども、武力に頼らずに国家を維持させている国もあります。そして、今現在、核の脅威にさらされているのは日本やヨーロッパ諸国、アメリカなどだけなのでしょうか。核の脅威は全世界にあるのです。そんな中、残念ではありますが、現実を見たときに核が廃絶される気配はなく、軍縮を積極的に働きかけてはいても、5核兵器国の軍縮、あるいはこの会議自体に何の期待も感じられずに、席についている国もあります。

今回の会議を通してこれが核をめぐる国際社会の現実で、これが「政治」でもあると感じました。来年に第3回準備委員会、再来年に再検討会議が行われますが、このあまり意味が見えない会議が今後このまま進むのか、何か変化が起きるのかに注目したいと思います。

(なかしま たいき、長崎大学多文化社会学部3年)

いのではないかとことです。日本でも「唯一の被爆国日本」とよく言ったり、また世界からもそう言われたりしているのをよく耳にします。しかし、この「唯一の被爆国日本」という言葉は歴史認識における大きな壁を作り出しているような気がしました。6期が発足した当初も、メンバーの一人である中国出身の孫さんと話していて、南京大虐殺と被爆についてお互いが持っている知識の量に明らかに差があると感じました。それはきっと、受けてきた歴史教育に違いがあるからだと思います。そしてそこに違いがあるのは、きっと各国において自国の歴史のどの部分をどう伝えていきたいかという方針が、その国の政策によっ

て決められているからではないかと思います。しかし、原爆の歴史は日本の歴史ではないのです。この、人やモノが簡単に行き交うグローバル化した社会において、私の好きな物も友達も世界中にいます。そしてその世界には、核兵器が未だに約1万4500発存在しています。そのリスクはこの時代に生きていて全ての人が共通に持っている、73年前は今リスクだと恐れられている事が実際に起きているのです。この事実は、日本の長崎、広島で起きたことではなく、この地球に、人類に起きたこととして捉えられるべき歴史だと思います。そこに政治的、経済的事情も関係するべきではないのです。私たちは、この認識を世界中の人に知ってもらい、もう一度自分と核兵器というものを考えてほしいという想いで、国連でプレゼンテーションをしてきました。

国連という場で何を話していいのか、長崎から来た若者とし

て何を伝えることができるのか、長い時間をかけてみんなで考えましたが、どの活動を通して今この時代に核兵器を考える上で大事なことは「継承」でした。世代を超えた「縦の継承」、そして、地域や国を超えた「横の継承」。これこそが、この時代における核兵器廃絶への大きな一歩ではないかと考えます。この考えを、同志と一緒に見出し共有できたこと、そしてそれを国連という場で発信できたのは、核兵器廃絶長崎連絡協議会、RECNAの皆様を始め、私たちをサポートして下さった方々のおかげです。本当に素晴らしい経験をさせていただきました。心から感謝しております。

この経験を通して得ることのできた学び、そしてこの思いをもっと多くの方に発信し続けていきたいと思っています。

(ながえ さき、長崎大学多文化社会学部3年)

賢人会議

賢人会議提言の骨子

朝長 万左男

核兵器禁止条約(以下TPNWと略)採択後、悪化する国際安全保障環境にくわえ「核兵器のない世界」を目指す核兵器国と非核兵器国/市民社会の間の深刻な分断がすすむことを憂え、岸田前外務大臣は第1回NPT準備会議において日本は日米安保条約を基本とする核抑止政策をとっており、TPNWには参加しないが、分断を解消するための「橋渡し政策」を提言する「賢人会議」を設置すると発表した。

16(海外から10)名の委員は2回の会合を重ね「提言 Recommendation」を河野新外務大臣に提出した(3月29日)。前文では全てのNPT加盟国の共通目標はNPT第6条で約束する「核なき世界」であること、しかし現在のNPT体制下では核軍縮は停滞していると結論。一方で「いかなる場合も核兵器を使用しない」国際規範が成立していることを強調。共同して核軍縮に当たる場合は礼節にくわえ異なる意見を尊重する態度が大事であることを強調した。

NPTは現在もなお核軍縮にとって中核的レジームである。過去のNPTの全ての決定は実現されねばならない:CTBTの完全批准/イランに関するJCPOAの実行/中東の非大量破壊兵器地帯カンファランス開催/全地球的核軍縮の基礎となる米ロの核コントロール体制の堅持/とくに新START条約の5年延長の実現/北朝鮮による核・ミサイル危機の全関係国による平和的対話による解決(現在進められているように)。

橋渡しの行動案

1. NPT再検討会議の強化策:全ての核兵器国は自身の核軍縮政策を公表すること/透明性が向上し、信頼醸成が格段

に進む/その後、非核兵器国および市民社会との対話を実行。

2. 信頼醸成が橋渡しの基礎:国際安全保障における核兵器の役割低減/国連常任理事会決議984の核兵器国による非核兵器国と非核兵器地帯条約加盟国に対する消極的安全保障の強化。

3. 異なるアプローチを収斂させる基盤形成:核軍縮における検証と強制についてのコンセンサス不在が問題/検証の強化と遵守の向上/核分裂物質の貯蔵問題とカットオフ条約にかかる協議の促進。

4. 多くの「困難な問題」がある:核抑止政策はある環境では安定をもたらすが、地球規模の安全保障においては、長期的には危険をもたらす。すべての国はこれに替わる安全保障の仕組みを考えなければならない/今後の核廃絶運動においてベンチマーク(Minimization Point)を明示する/一国の危急存亡の際の自己防衛の権利に関し、限定的核の使用の脅威・核の使用を想定する場合に、国際人道法を考慮すること/最大のディレンマである全ての国のNPTレジーム下における義務と遵守において強制とのバランスをどう解決するか。

河野外務大臣は第2回NPT再検討会議準備委員会において日本政府はこの提言の内容を政策に取り入れていくことを声明した。今後、日本の「橋渡し」はNPT再検討会議においての具体的提案と核抑止の克服に関する国際カンファランスの開催などにより本気度が試される。

(ともなが まさお、RECNA客員教授、賢人会議メンバー)

RECNAの活動

2018年4月1日～2018年6月30日

- | | | | |
|-----------------------|---|----------------------|--|
| 4月14日(土)
～4月18日(水) | ■International Panel on Fissile Materials(韓国・ソウル) (鈴木センター長、吉田副センター長) | 5月22日(火) | ■長崎市立黒崎中学校講演会(吉田副センター長) |
| 4月23日(月)
～5月4日(金) | ■2020NPT再検討会議第2回準備委員会モニター(スイス・ジュネーブ) (調学長特別補佐、鈴木センター長、広瀬副センター長) | 5月25日(金) | ■モラヴィアン大学RECNA訪問(鈴木センター長、広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表团) |
| 4月24日(火) | ■赤十字国際委員会(ICRC)本部訪問(スイス・ジュネーブ) (調学長特別補佐、ナガサキ・ユース代表团) | 5月26日(土) | ■平成30年度核兵器廃絶市民講座
第1回「北東アジアの非核化と安全保障」
講師:鈴木 達治郎(RECNAセンター長)
広瀬 訓(RECNA副センター長)
場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 |
| 4月25日(水)、
4月28日(土) | ■日本語補習校における模擬授業(スイス・ジュネーブ) (調学長特別補佐、広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表团) | 5月31日(木)
～6月1日(金) | ■第3回「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」開催(ロシア・モスクワ) |
| 4月26日(木) | ■平和首長会議主催ユースフォーラム(スイス・ジュネーブ) (広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表团) | 6月7日(木) | ■第3回「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」報告記者会見(RECNA会議室) |
| 4月26日(木) | ■ジュネーブ軍縮会議日本政府代表部訪問(スイス・ジュネーブ) (調学長特別補佐、広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表团) | 6月8日(金) | ■ナガサキ・ユース代表团第6期生活動報告会(長崎大学G38番教室) |
| 4月27日(金) | ■ナガサキ・ユース代表团主催サイドイベント(スイス・ジュネーブ, パレ・デ・ナシオン) (調学長特別補佐、広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表团) | 6月13日(水) | ■「2018年度核弾頭・核物質データポスター完成報告」及び「米朝首脳会談と共同声明に関する見解発表」記者会見(RECNA会議室) |
| 5月17日(木) | ■第34回RECNA研究会
「核兵器禁止条約と核不拡散条約(NPT)」
講師:田井中 雅人(朝日新聞記者)
場所:RECNA会議室 | 6月13日(水) | ■核兵器のない世界を目指す議員連盟講演(東京・衆議院議員会館) (吉田副センター長) |
| 5月21日(月) | ■核兵器廃絶長崎連絡協議会総会(RECNA会議室) | 6月22日(金) | ■諫早市立諫早北小学校平和講座(広瀬副センター長) |
| 5月21日(月)
～5月24日(木) | ■Workshop on Measures to Reduce Civil Plutonium Stockpiles(オーストリア・ウィーン) (鈴木センター長) | 6月23日(土) | ■平成30年度核兵器廃絶市民講座
第2回「核兵器禁止条約をめぐる日本の課題:賢人会議の提言」
講師:朝長 万左男(RECNA客員教授)
場所:島原市森岳公民館 |
| | | 6月26日(火) | ■韓国全北大学短期留学特別講義(広瀬副センター長) |
| | | 6月27日(水) | ■長崎県立鶴南特別支援学校平和講座(広瀬副センター長) |

お知らせ

平成30年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」
第3回「在日米軍と北東アジアの安全保障」
講師:梅林 宏道(RECNA客員教授)
日時:2018年9月22日(土) 13:30～15:30
場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ

※受講料は無料、参加申し込み不要。
※15:30～16:30「RECNAと語る」



RECNA ニュースレター
長崎大学核兵器廃絶研究センター
第7巻1号 2018年6月30日発行
発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2018 長崎大学核兵器廃絶研究センター

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 7 No. 2 September 2018

「核なき世界」へどう進むか オバマ氏の側近が講演

吉田 文彦

40代の前半で、当時のオバマ大統領が主のホワイトハウスに、核政策立案チームの一員として加わった俊英。プライベートでは大の野球好きで、ニューヨークっ子だったことからヤンキースを応援する。広島を訪れた時には、カーブの応援に球場まで足を運んだ。普段の会話では冗談もたくさん織り交ぜながら、興味深い政権の裏話などを語ってくれる。

そんなジョン・ウォルフスタール元大統領特別補佐官が、8月24日に長崎大学文教キャンパスに足を運んでくれた。「核なき世界」へどう進むかと題した講演会(核兵器廃絶長崎連絡協議会主催)で、核兵器に依存しない平和と安全の重要性を説いた。大学生や市民ら80人が参加し、質疑応答の時間には次々と質問の手があがった。

ウォルフスタール氏の話の中で、私が最も印象に残ったポイントは以下のような指摘だった。

オバマ氏が「ブラハ演説」でも語ったように、「核なき世界」を実現するにしても、短時間ではそこにはたどりつけない。現在の米国の政権、米国とロシアの関係などを考えると、急速に核軍縮が進むとも考えにくい。

しかし、人々が核兵器に対する考え方を換え、それを反映する形で核廃絶に情熱を傾ける政治指導者が出てきた時に、「こうすれば核廃絶できます」という構想、政策を提示できるように準備しておく必要がある――。

迂遠に思えるかも知れないが、とても大切なポイントに思えた。

オバマ氏が核軍縮を進めきれないままホワイトハウスを去ったあと、「核なき世界」へのビジョンを牽引する政治指導者を失ったような空白感が世界を漂った。むしろ、だからこそ、だろう。今すぐに採用してくれる政治指導者がいなくても、そうした政治指導者が生まれ、そして増えていくことを後押ししながら、核廃絶への具体策を整理して、いつでも手渡せるようにしておく。被爆地、そして長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)のこれからの目標の大きな柱はそこにあるのではないか、と思った。

参加していただいた方々の多くが、アンケートに協力してくださった。その中に、「被爆者の質問も受けて欲しかった」という



講演するジョン・ウォルフスタール氏
(場所:長崎大学文教キャンパス内 写真:PCU-NC提供)



交流した学生とジョン・ウォルフスタール氏(中央)
(場所:長崎大学文教キャンパス内 写真:RECNA撮影)

趣旨の記載があった。できるだけ幅広い年齢層の皆さんの質問に答えられるようにとめたつもりだったが、申し訳ない結果になってしまった。大きな反省点とさせていただきます。

講演の前、ウォルフスタール氏はナガサキ・ユース代表団を中心とする学生たち、約10人と、通訳なしで対話した。予定の時間を大幅に超えて話が弾み、講演開始の5分前になった。文字通り時間切れでお開きにせざるを得なかったが、世界トップレベルの核問題の専門家と直に話せたことは、若い世代にとって貴重な経験になったことだろう。

(よしだ ふみひこ、RECNA副センター長)

米朝会談

米朝首脳会談の意義と今後の課題

鈴木 達治郎

2018年6月12日の米トランプ大統領と北朝鮮キム・ジョンウン(金正恩)労働党委員長との歴史的会談をうけて、RECNAでは、まず「米朝首脳会談と共同声明」に関する見解を6月13日に発表した。そこでは、つい半年前までいがみ合った両国が歴史的な対話を果たし、外交による非核化に踏み出したことの意義を強調した。一方、現段階では完全な非核化までの道筋が明確になったわけではなく、未解決の課題も山積みであることも指摘した。特に、「非核の制度化」と「平和の制度化」が重要と指摘した。

それを受けて、RECNA教授陣が各専門分野ごとに、米朝首脳会談の意義と今後の課題についてまとめたものが、RECNAポリシーペーパー(REC-PP-07: <http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/38424/1/REC-PP-07.pdf>) である(2018年7月発行)。第1章では、鈴木が、核武装した国が非核化するプロセスを法的拘束力のある形で検証した例はなく、朝鮮半島の非核化を検証するためには、「新たな制度を構築する必要がある」と指摘した。第2章では、広瀬副センター長が、「朝鮮戦争の終結には、米朝のみならず、韓国、中国も関与する必要がある、また平和条約の締結は在韓米軍や日本国内の駐留米軍の在り方にも影響を与える」と

分析している。第3章では、吉田副センター長が、地域の平和制度化のポイントとして、「信頼醸成の向上、危機管理システムの構築、軍備管理、そして経済力」の4点が重要と指摘した。最後の第4章では、梅林前センター長(客員教授)が、「北東アジア非核兵器地帯構想」は、「望ましいエンド・ピクチャーである」とし、「朝鮮半島の非核兵器地帯」に日本が参加することで、安定した地域のエンド・ピクチャーになると指摘している。

その後、米朝の非核化交渉は、順調に進んでいるとはいいがたい。北朝鮮はミサイル発射台を解体したと報じられたが、一方で秘密のウラン濃縮施設が存在が米国シンクタンク科学国際安全保障研究所(ISIS)から報じられている。こういった情報もあり、トランプ大統領はポンペオ国務長官を北朝鮮との交渉に派遣するのを中止してしまった。しかし、8月末時点では、交渉を中止する決定はなされておらず、南北会談も3回目が9月5日に平壤での開催が予定されている。

短期的な動向に一喜一憂することなく、この流れを後戻りさせないよう、上記のような課題を解決すべく、忍耐強く交渉を続けていくことが望まれる。

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

ナガサキ・ユース代表団

図書館ギャラリー展

ナガサキ・ユース代表第6期生

原田 怜奈

ナガサキ・ユース代表団は、事後活動として2018年7月1日(日)~7月16日(月)までの間、長崎大学附属図書館で写真展示会を行いました。任命後からジュネーブ渡航前までの事前学習、渡航中の活動、報告会の様子を約50点の写真とキャプションで伝え、Peace Caravan隊に関する情報を載せた模造紙も2点展示しました。この展示会の目的は、ナガサキ・ユース代表団6期生の活動をより多くの市民に発信し、核兵器問題の認知を高め、若者の興味・関心を喚起することです。さらに、同年10月から始まる、ナガサキ・ユース代表団7期生の募集に向けた広報活動も兼ねて、実施に至りました。

展示内容は、2018年4月23日(月)~5月4日(金)の間にジュネーブ・スイスで開催されたNPT再検討会議第二回準備委員会での会議傍聴を主軸とし、国際機関訪問やサイドイベント、平和出前講座なども盛り込みました。人の目の高さに合わせて写真を配置したり、写真パネルも見やすいようにカットしたりと、展示にも様々な工夫を凝らしています。見に来てくださった方々のアンケートからは、「活動がよく分かった」、「メン



写真展の様子

(場所:長崎大学附属図書館(文教キャンパス)内 写真:PCU-NC提供)

バーが楽しそうにしている良かった」、「他の場所でもやってほしい」などの意見をいただきました。

私たちは、核兵器問題のタテ(被爆者から次の世代へ)の継承は比較的注目されているにも関わらず、ヨコ(長崎から全国へ、日本から世界へ)の継承が不十分だと感じています。この展示会は今までのナガサキ・ユースを見ても初の試みでした

が、長崎の大学生を含む若者と長崎市民へのヨコの継承の一歩となれば嬉しい限りです。

(はらだ れな、多文化社会学部 3年)

※第2回ギャラリー展は、10月1日(月)から10月14日(日)、長崎大学附属図書館(文教キャンパス)にて開催予定です。

ナガサキ・ユース代表団

出前授業を通して

ナガサキ・ユース代表第6期生

三浦 大輝

ナガサキ・ユース代表団は、帰国後の活動の一環として、依頼を頂いた日本全国の学校へ赴き出前授業を行う活動を行いました。私は、県内2校と県外4校の計6校を訪問し、それぞれの学校の要望に応じた出前授業を実施しました。6校で実施した授業を通して、地域によってどうしても『原爆の被害』を知る機会に差があることを再確認しました。長崎県内の中でも長崎市に近い学校の生徒は、「原爆の被害がどのようなものだったか」、「どれほど恐ろしいものなのか」を知る機会が学校教育やその他の場で多く設けられています。一方で対馬などの物理的に離れた地域にある学校では、学校教育の平和集会が原爆の被害を学び知る唯一の場でした。県外ともあれば、学校の社会科学の授業でのみ多少触れるという状態です。このように、地域によって学べる事柄や材料、学校教育におけるカリキュラムに違いがでるのは当然のことです。

しかしながら、私は広島や長崎に原爆が落とされたから、その地域に住む人だけが深く考えればいいものだとは思いません。それは、福島原発事故や自然災害の被害を大きく被った地域を考えればよくわかることだと思います。福島で原発事故があったからその被害を受けた人だけが考えればいいことなのか…。あるいは大地震があった地域は、その地域に住む人だけが対策をすればいい話なのか…。核兵器の問題も同じです。

原発を持つ地域は福島の事故から学び、今一度考えなおす必要があるでしょう。大震災においても、その地域の復興の



出前授業の様子

(場所:平和教育公開授業 in 函館 写真:PCU-NC提供)

プロセスから学ぶべきことがたくさんあるでしょうし、自治体のハザードマップを見直したりすることも必要になると思います。

要は他人事としてとらえず、常にある事柄が本当に自分と関係ないことなのかを考え、情報を集めていくことが大事なことです。冒頭に話した地域によってできる学ぶ情報の差。核兵器の問題に関しては、ナガサキ・ユース代表団がその差を少しでも埋める活動に貢献できればと思います。こうした出前授業を通して、日本中のより多くの人が広島や長崎の被爆の実相や平和、現代の核兵器の問題を知り、考える人が多くなれば幸いです。

(みうら たいき、サセックス大学 環境開発学 進学)

RECNAの活動

2018年7月1日～2018年9月30日

- | | | | |
|----------|--------------------------------|----------|--|
| 7月4日(水) | ■諫早市立喜々津中学校平和学習(ナガサキ・ユース代表団) | 7月14日(土) | ■雲仙市立千々石中学校平和講座(広瀬副センター長) |
| 7月5日(木) | ■諫早市立諫早中学校平和学習(ナガサキ・ユース代表団) | 7月19日(木) | ■聖心女子学院高等科生徒7名来訪:(鈴木センター長) |
| 7月11日(水) | ■諫早市立喜々津中学校平和学習(ナガサキ・ユース代表団) | 7月20日(金) | ■長崎県立猶興館高校出前講座(広瀬副センター長) |
| 7月11日(水) | ■ベトナム交流人財招致事業講演(鈴木センター長) | 7月22日(日) | ■国際シンポジウム「平和への扉を開く」(広島国際会議場)参加(鈴木センター長) |
| 7月14日(土) | ■全国大学生協連「Peace Now」講演(鈴木センター長) | 7月28日(土) | ■国際平和シンポジウム2018「核兵器廃絶への道」(長崎原爆資料館)参加(吉田副センター長) |

RECNAの活動

2018年7月1日～2018年9月30日

- 7月30日(月) ■RECNAポリシーペーパー「米朝首脳会談の意義と今後の課題」発行に伴う記者会見(鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副センター長)
- 8月3日(金) ■埼玉県行田市平和事業(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月4日(土) ■長崎原爆忌平和祈念俳句大会講演(広瀬副センター長)
- 8月7日(火)～8日(水) ■明治学院大学生とユースとの交流会(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月8日(水) ■連合2018平和ナガサキ集会講演(長崎県立総合体育館)(鈴木センター長)
- 8月9日(木) ■対馬市平和集会(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月10日(金) ■三重県四日市子ども向け平和学習講座「核兵器について考えよう」(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月16日(木)～18日(土) ■神奈川県小田原市ワールドキャンプ in Odawara～世界で羽ばたくナガサキ・ユース代表团と学ぼう～(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月20日(月) ■創価高等学校「長崎フィールドワーク」講演(全炳徳教授)
- 8月21日(火)～23日(木) ■北海道函館市平和公開授業(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月23日(木) ■長崎県日中韓青少年交流事業参加(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月24日(金) ■特別市民セミナー「“核なき世界”へどう進むか～核軍縮に逆行するトランプ核戦略～」
講師:ジョン・ウォルフスター
(米国オバマ政権・核政策担当大統領特別補佐官)
場所:長崎大学文教キャンパスG-38
- 8月26日(日)～28日(火) ■北海道豊浦町「非核・平和の町宣言」講演会(ナガサキ・ユース代表团)
- 8月28日(火) ■2018年度版「世界の核弾頭データ」および「世界の核物質データ」しおり公開
- 8月29日(水) ■長野県松本市 松本ユースネットワーク来訪(ナガサキ・ユース代表团)
- 9月22日(土) ■平成30年度第3回核兵器廃絶市民講座 第3回「在日米軍と北東アジアの安全保障」
講師:梅林宏道(RECNA客員教授)
場所:国立長崎原爆死没者追悼祈念館
- 9月24日(月) ■核兵器廃絶日本NGO連絡会9.26「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」シンポジウム(東京)(ナガサキ・ユース代表团)

お知らせ

ナガサキ・ユース代表团第7期生募集

募集期間:2018年10月15日(月)～11月1日(木)
 応募方法:志望動機、履歴書を提出 ※様式はwebよりダウンロード
 主催:核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)
 詳細はwebをご参照ください。



< 募集概要掲載webサイト >

ナガサキ・ユース代表团・Peace Caravan隊 第2回写真展

若者たちの取組、ナガサキ・ユース代表团とPeace Caravan隊を写真にてご紹介します。第1回の模様は、本紙P2をご覧ください。

期 間:2018年10月1日(月)～10月14日(日)
 場 所:長崎大学附属図書館(文教キャンパス)
 開館時間:平日 8:30～22:00 / 土、日、祝日 10:00～20:00

平成30年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」

第4回「岐路に立つ日本の非核」
 講 師: 太田 昌克(共同通信編集委員、RECNA客員教授)
 日 時: 2018年11月3日(土) 13:30～15:30
 場 所: 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ

第5回「反戦主義者なる事通告申し上げます」
 講 師: 森永 玲(長崎新聞論説委員長、RECNA客員教授)
 日 時: 2018年12月1日(土) 13:30～15:30
 場 所: 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ
 ※受講料は無料、参加申し込み不要。
 ※15:30～16:30「RECNAと語ろう」
 主催:核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)



第7巻2号 2018年9月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
 〒852-8521 長崎市文教町1-14
 Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
 E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
 http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2018 長崎大学核兵器廃絶研究センター

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 7 No. 3 December 2018

マーク・スー博士を招き、東京で記者会見

吉田 文彦

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)と長崎大学核廃絶研究センター(RECNA)は、北朝鮮情勢に詳しいバグウォッシュ会議評議員の政治学者、マーク・スー博士(韓国出身、ベルリン在住)を東京に招いた。

スー博士は11月9日(金)、東京・内幸町にある日本記者クラブで同クラブ主催の記者会見にのぞみ、非核化に関する北朝鮮の動きや外交戦略、金正恩体制の権力基盤などについて所感を述べた。同日に、報道機関のシニアライター・エディターを対象としたラウンドテーブルも開催し、活発な議論が展開された。

スー博士はこれまでたびたび平壤を訪問し、政府や朝鮮労働党の幹部らと意見交換してきた北朝鮮通だ。バグウォッシュ会議でも長年にわたって、北朝鮮との関係をつなぐパイプ役を担ってきた。「また聞き」の情報ではなく、自分自身で見聞きした一次情報に基づいた分析は説得力があり、記者会見に出席したジャーナリストたちもしきりにメモをとっていた。

スー博士が北朝鮮に訪れるようになったのは2001年からだ。同時多発テロ(9.11テロ)を受けて、米国政府が北朝鮮をテロ支援国家とみなし、「悪の枢軸」のひとつとして名指しするようになった。

こうした北朝鮮への「敵対政策」に潜むリスクを深く憂慮し、平壤との交流に直接関わっていくことにした。

スー博士は記者会見で、いくつも「秘話」を披露した。そのひとつが今年になって南北関係が一気に好転するにいたった経緯である。スー博士の説明によると、以下のような舞台裏の動きがあった。

大きな転機は、2017年5月に韓国で文在寅大統領が就任したことだ。幼少の頃に起きた朝鮮戦争の際、韓国の難民キャンプで厳しい暮らしをした経験を持つ文大統領は、政権発足当初から南北の関係改善に強い意欲を持っていた。そしてさっそく、7月に訪問先のベルリンで演説し、北朝鮮に向け3つの重要なメッセージを送った。その骨子は①北朝鮮の体制変更は求めない、②朝鮮半島の早期の統一も目指さない、③北朝鮮が米国・日本等と新しい関係を樹立することを韓国が妨害することはない——である。



マーク・スー博士 2018年11月9日
(場所:日本記者クラブ 写真提供:PCU-NC)

核・ミサイル実験を繰り返していた北朝鮮ではあったが、文大統領の演説に敏感に反応し、10月にスー博士を平壤に招いた。

北朝鮮では「仮に米国が抵抗したとしても、文大統領はベルリンで示した約束を守るのか」と何度も尋ねられた。スー博士は「(2018年2月開催の)平昌(韓国)での冬季オリンピックが(南北接近の)チャンスで、韓国との対話の機会を持った方がいい」と助言した。もちろん、この言葉だけで北朝鮮が政策転換したわけではないだろうが、スー博士が重要な助言役をしてきたことを物語るエピソードだった。

ラウンドテーブルに出席したのは、RECNAが招待した約10名。チャタムハウス・ルール(発言者の名前の引用は不可)のもとで行われた。

東京の報道機関を対象にしたラウンドテーブルはRECNAとしては初めての試みだったが、出席者からは「また、ぜひ」との要望が相次いだ。PCU-NCのご厚意、同事務局のご尽力で、初の試みを成功させることができた。

(よしだ ふみひこ、RECNA副センター長)

ナガサキ・ユース代表団

第7期生決定

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)が主催するナガサキ・ユース代表団は、今年で7回目となり、第7期生として、第6期生の経験者2名を含む下記の9名が選ばれた。第7期生は2019年4月～5月にニューヨークの国連本部で開かれる2020年NPT再検討会議第3回準備委員会に派遣される予定で、その前後、長崎から核廃絶へ向けての発信を行うために必要な活動も併せて行うことになっている。

●厚田 梨帆(あつた りほ)

長崎大学多文化社会学部2年

初めまして。長崎で勉強している一学生として、一日本人として、そして一人の人間として様々な視点から物事を見ていけるように頑張ります。今回の機会を活かして、精一杯自分の出来ることを仲間と共に取り組んでいきます。よろしくお願いします。

●内橋 寛二(うちわし かんじ)

長崎大学多文化社会学部3年

核兵器廃絶という目標を平和な世界を目指す上でやるべきことの一部分であることを心に留めて、被爆地長崎で生きる人間として核廃絶への活動に取り組みながら、世界で起きている様々な問題に目を向けていきたいと思います。

●何 雲艶(か うんえん)

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士課程3年
私は中国福建省からの留学生、何云(雲)艳(艶)と申します。長崎で勉強する間に、平和な世界はすべての基礎であることを学びました。核兵器と戦争がない平和な世界を築き上げることは私たち若い世代が担うべき責任だと思えます。これから、世界平和と文化交流に貢献していきたいと思えます。

●高見 すなお(たかみ すなお)

長崎大学多文化社会学部1年

長崎大学多文化社会学部1年の高見すなおです。栃木県で経験した2011年の原発事故の際に感じた恐怖、長崎の被爆者の方の体験を通じて、「核」が人間にもたらす「痛み」を肌で感じた経験のある者として、核兵器の恐ろしさを世界に伝えたいです。

●永江 早紀(ながえ さき)

長崎大学多文化社会学部3年

こんにちは。私は、今回、2回目のチャレンジとなる永江早紀です！6期生の活動の中で、被爆の歴史をナガサキやヒロシマの歴史ではなく、人類の記憶として、世代や国境を越えた継承をしていくことが大事だと気づきました。7期生でもこの想いをもっと多くの方へ発信していきたいです！



ナガサキ・ユース代表団第7期生 2018年12月6日
(上段左より矢野、永江、厚田、中山、内橋、下段左より牟田、高見、何、中島)
(場所・RECNA 写真提供・PCU-NC)

●中島 大樹(なかしま たいき)

長崎大学多文化社会学部3年

現在の国際情勢から核なき世界の実現が困難にも見える中、核兵器禁止条約の進歩、前回のジュネーブでの第2回準備委員会への世界からの若者の参加など、実現へ向けていくつかの希望の兆しもあります。ともに、今出来ること、将来に向けてすべきことを考えていきましょう。

●中山 穂香(なかやま ほのか)

長崎大学歯学部1年

私は関東出身で、大学進学に当たり長崎に来て長崎の人々との核に対する意識の違いに驚きました。自らが無知であることを知り被爆の実相について学びたいという思いを強くしました。ユースの一員として学び、考え、発信することで核なき世界の実現に貢献します。

●牟田 麗(むた うらら)

長崎大学多文化社会学部1年

原爆の惨禍による多くの苦しみや悲しみを人々は乗り越え、今、私が同じ地、長崎に存在し、生まれ育ってきた意味を改めて考えつつ、このユース活動を通して多角的に物事を学び・考え・行動することで今後の社会を担う世代である私たちがどのようにしていかなければならないのかを7期生の仲間と多くの人々と共に考え、”action”に変えていけるような人へ成長したいと思っています。
(次ページにつづく)

●矢野 大輝(やの だいき)

長崎大学工学部1年

核兵器のない世界を実現するためには、私達一人一人が自分には何が出来るのか、どうすれば核兵器のない平和な世界

を実現できるのかを考えなければいけません。私はこういった思いを持ちながら、精一杯ユースの活動を全うしたいと思っております。

特別市民セミナー 「原爆投下は必要なかった」歴史家・長谷川毅氏

山口 響

原爆投下国アメリカの地で、その使用に至る政治的プロセスを鋭く抉る思索を続ける日本人歴史家がいる。その名は、長谷川毅(はせがわ・つよし)氏。北海道大学スラブ研究センターから米国のカリフォルニア大学サンタバーバラ校歴史学部に移られた後、本来の専門であるロシアに関する知見を活かして、原爆投下と日本の降伏をめぐる米国・ソ連・日本三国の相克に焦点を当てる研究を世に放った稀有の歴史家である。この研究は、米国においては *Racing the enemy: Stalin, Truman and the Surrender of Japan* (2005)、日本においては『暗闘』(中央公論新社、2006年。のち、中公文庫)という形で、それぞれまとめられている。

研究者として原爆問題を扱ってこられた長谷川氏にとって、意外にも今回が初めての長崎入り。本来はプライベートなご旅行の予定だったものを、私たちの強引な要請に応じて、長崎の市民の前でご講演を賜ることになった。実質2日間の滞在中で、長崎市長や長崎大学長の表敬訪問、原爆資料館見学、原爆関連遺構巡りなどを精力的にこなされ、10月10日、長崎人文学教キャンパスを会場とした特別市民セミナー「原爆、ソ連参戦と日本降伏の決定」に臨まれた。

『暗闘』をベースにした講演で長谷川氏は、原爆投下を正当化する2つの仮定に挑戦された。

第一の仮定は、日本を降伏させるために、トルーマン大統領には「日本本土の攻撃」が「原爆投下」かの2つの選択肢しかなかった、というもの。一般的には、前者がもたらすきわめて大きな人的犠牲を回避するために、後者がやむを得ず選択された、と説明されることが多い。

これに対して長谷川氏は、「ソ連の対日参戦」と「日本に対する君主制存続の保証」というオプションは十分に追求されなかった、と批判した。米国のトルーマン大統領は、米英中によるポツダム宣言へのソ連の署名を拒絶し、あわせて日本の君主制に関する言及を宣言文から巧妙に排除した。これによって日本政府は、ソ連による和平の斡旋という誤った方針に希望をつなぎ続けることになり、結果としてポツダム宣言を「黙殺」した。そしてこの「黙殺」は、原爆投下へのアリバイを与えることになったのである。

第二の仮定は、原爆投下が日本の降伏に決定的な役割を果たした、というものである。



長谷川毅名誉教授 2018年10月10日
(場所:長崎大学教養教育棟 撮影:PCU-NC)

長谷川氏はこの仮定も厳しく批判する。8月6日の広島への原爆投下後、最高戦争指導会議は開かれなかったが、8月9日未明にソ連が日本に宣戦布告し満州に雪崩を打って攻め込んだ際には、直ちに同会議が開かれ、その後、昭和天皇による降伏の「聖断」につながる。他方で、長崎原爆は政府の降伏決定に何の影響も与えていなかった。

これら2つの仮定の否定を通じて、長谷川氏は、日本への原爆投下は不要だったと結論づけるのである。

あわせて長谷川氏は、米国は1945年までの時点で、民間人に残虐な取り扱いをしてはならないという倫理的敷居をすでに超えてしまっていた、と論じる。アメリカの名誉のために、原爆投下は戦争犯罪であると認めるべきだ、とまで同氏は言い切った。

返す刀で長谷川氏は、日本の戦争責任の問題にも触れる。日本政府が早く降伏の決定を下していたら、原爆投下もソ連参戦もなかった。それを回避できなかった日本の為政者には責任がある、と指摘するのである。

73年前の原爆投下を正当化しうるかどうかという問題は、今後の核兵器使用を予防する上で、避けて通れない問いだ。いったん容認されたことは、今後、二度、三度と認められる可能性が高いからである。長谷川氏は、長崎の市民に人きな宿題を残して帰られた。

(やまぐち ひびき、RECNA客員研究員)

RECNAの活動

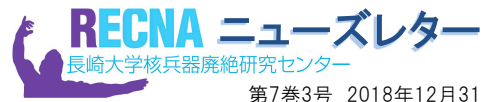
2018年10月1日～2018年12月31日

- | | | | |
|-------------------------|---|-------------------------|--|
| 10月2日(火) | ■第3回長崎被爆・戦後史研究会「継承の力学ー
広島における「被爆体験」の遺産化とその影響」
講師:根本雅也氏
場所:長崎大学RECNA会議室 | 11月9日(金) | ■記者会見(日本記者クラブ主催)
出席者:マーク・スー博士
会場:日本記者クラブ |
| 10月3日(水) | ■国連軍縮フェローシップ講演(長崎原爆資料館)
(広瀬副センター長) | 11月9日(金) | ■RECNAラウンドテーブル「最新の北朝鮮並びに韓
国情勢について」
講師:マーク・スー博士
会場:日本記者クラブ |
| 10月10日(水) | ■特別市民セミナー「原爆、ソ連参戦と日本降伏の
決定」
講師:長谷川毅氏(カリフォルニア大学サンタバー
バラ校名誉教授)
場所:長崎大学教養教育棟 | 11月15日(木) | ■日本非核宣言自治体協議会U-40世代の交流に
よるネットワーク拡大事業講演(国立長崎原爆死没
者追悼平和祈念館)(鈴木センター長) |
| 10月13日(土) | ■市民対話集会2018講演(佐賀市保健福祉会館)
(鈴木センター長) | 11月16日(金)～
11月18日(日) | ■第6回核兵器廃絶地球市民長崎集会(原爆資料
館)(鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副
センター長、中村准教授、黒沢顧問、朝長客員教
授、梅林客員教授、太田客員教授) |
| 10月13日(土) | ■「ヒバクシャ国際署名」をすすめる長崎県民の会
2周年のつどい(長崎原爆被災者協議会講堂)
(広瀬副センター長) | 11月24日(土) | ■第2回地球未来シンポジウム「核と鎮魂Ⅱ」講演
(京都芸術劇場 春秋座)(鈴木センター長) |
| 10月14日(日) | ■第62回香料・テルペンおよび精油化学に関する
討論会特別講演(長崎大学)(鈴木センター長) | 11月24日(土) | ■JENESYS2018大洋州島しょ国との青少年交流
(長崎大学総合教育研究棟)(中村准教授) |
| 10月14日(日) | ■「語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)推進事業」
講演(長崎原爆資料館)(広瀬副センター長) | 11月27日(火) | ■国立ソウル大学校統一平和研究院訪問(吉田副
センター長、広瀬副センター長、全教授) |
| 10月17日(水)～
10月20日(土) | ■Cyber Security Workshop参加(ロンドン)(鈴木セ
ンター長) | 11月28日(水) | ■国立統一研究院、延世大学、北韓情報センター
訪問(鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副
センター長、全教授) |
| 10月30日(火)～
11月3日(土) | ■Exploring New Approaches to Arms control in
the 21st century: Focusing on maintaining and
expanding the integrity of the INF Treaty and
Presidential Nuclear Initiatives (PNIs)ワークショッ
プ参加(オスロ)(吉田副センター長) | 11月29日(木) | ■韓国国立外交院日本研究センターセミナー講演
(鈴木センター長) |
| 11月3日(土) | ■平成30年度核兵器廃絶市民講座
第4回「岐路に立つ日本の非核」
講師:太田昌克氏(RECNA客員教授) | 11月29日(木) | ■韓国世宗研究所訪問(鈴木センター長、吉田副
センター長、全教授) |
| 11月4日(日) | ■平和のみみ(美海)ちゃんの集い2018講演(神戸ま
ちづくり会館)(鈴木センター長) | 12月1日(土) | ■平成30年度核兵器廃絶市民講座
第5回「反戦主義者なる事通告申し上げます」
講師:森永玲氏(RECNA客員教授) |
| 11月4日(日) | ■反核医師のつどい講演(長崎原爆資料館)(中村
准教授) | 12月6日(木) | ■ナガサキ・ユース代表団第7期生任命式
(調学長特別補佐、広瀬副センター長、ナガサキ・
ユース代表団) |
| | | 12月10日(月)～
12月13日(木) | ■RSIS Roundtable on Nuclear Energy Develop
-ment in Southeast Asia: Emerging Challenges
and Opportunities/パネリスト(シンガポール)(鈴木セ
ンター長) |

お知らせ

平成30年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」

第6回「核廃絶寸前 レイキャビク首脳会談の教訓」
講 師: 吉田文彦 (RECNA副センター長)
日 時: 2019年1月26日(土) 13:30～15:30
場 所: 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ
※受講料は無料、参加申し込み不要
※15:30～16:30「RECNAと語ろう」
主催:核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)



発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2018 長崎大学核兵器廃絶研究センター

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 7 No. 4 March 2019

国立ソウル大学校統一平和研究院(IPUS)との協力覚書更新： 韓国研究機関との連携を強化

鈴木 達治郎

2019年1月9日(水)、国立ソウル大学校統一平和研究院(Institute for Peace and Unification Studies)とRECNAの協力覚書更新のための調印式と記者会見がRECNAにて開催された。IPUSからは、イム・キョンフン院長をはじめ、総勢7名のメンバーがRECNAを訪れた。7名の専門は、それぞれ政治、経済、農業経済、平和研究、憲法と多岐にわたっており、研究院の持つ多様性を反映したメンバーであった。

IPUSとRECNAの協力覚書は、「長崎大学と国立ソウル大学校との間の学術交流協定書」(2007年7月16日締結、2012年7月16日に更新)に基づくもので、2014年2月1日に両研究機関の間で締結されたものである。

両研究機関の協力のきっかけは、2013年6月、韓国の韓信大学にてRECNAが主催した「北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ 第2回国際ワークショップ」にIPUSのスタッフが参加したことであった。これを機に2014年1月に、広瀬RECNA副センター長と全教授がIPUSを訪問し、協力関係の構築について意見交換を行った結果、2月に覚書を締結することとなった。それに基づき、2014年9月、東京で開催されたRECNA主催の「北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ 第3回国際ワークショップ」にIPUSスタッフが参加、2016年4月にはナガサキ・ユース代表団がIPUSを訪問して、意見交換を行うなどの交流を実施してきた。

しかし、その後は研究機関同士の交流がしばらく途絶えており、2018年に朝鮮半島情勢が急変したことを受け、再び交流を活発化する方向で検討を始めることとなった。そして、2018年11月、RECNAスタッフがソウル大学校を訪れ、IPUSと意見交換を行った結果、覚書を更新することで合意に達したのである。

IPUSは国立ソウル大学内に設置された独立の研究機関であり、RECNAと同様、特定の学部には属していない。研究は、統一研究センター(Center for Unification Studies)と平和と人文研究センター(Peace and Humanities Research Center)が存在しており、統一問題や北朝鮮の政治・経済情勢の分析のみならず、平和研究や信頼醸成など多岐にわたっている。ただ、核問題に関しては専門家が少なく、



調印式の様子、左がイム院長、右が鈴木センター長 2019年1月9日
(場所:RECNA 撮影:RECNA)



訪問されたIPUS研究者らとRECNA教員 2019年1月9日
(場所:RECNA 撮影:RECNA)

「RECNAとの協力関係は、IPUSにとっても『非核化問題』を研究する意味で非常に有意義である」、とイム院長は記者会見で述べられた。逆にRECNAにとっては、朝鮮半島そのものの専門性が不足しており、北東アジアの非核化を研究する意味でも、IPUSの多様な専門性は大変魅力的である。

調印式と記者会見の後、北朝鮮情勢に詳しいキム・スチュル教授より記者向けの解説をしていただき、最新の動向と今後の課題について、貴重な情報提供をしていただいた。特

に、「完全な非核化を求めるより、部分的にでも検証可能な非核化を進めることが重要」、「核問題のみならず重要なのは朝鮮半島の平和を実現することだ」、「日韓は共通の目的を共有していることをまず認識すべきだ」、といった重要な見解を紹介していただいた。また、会合後、河野学長のもとへも表敬訪問していただき、意見交換を行った。

最後に、本ニュースレターで紹介されているように、RECNAはIPUSのほか、世宗研究所や韓信大学との協力関係を再構

築し、米国のノーチラス研究所やカーネギー平和財団との協力関係も強化して、日米韓の専門家ネットワークを構築し、北東アジアの非核化にむけて政策提言能力を強化していく所存である。

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

研究協力 (世宗研究所)

韓国の世宗研究所と新たな協力へ

吉田 文彦

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の教員を中心とする研究チームが2018年11月29日、韓国を代表する民間研究機関である世宗研究所を訪問した。情勢が大きく動き始めた北朝鮮の非核化をめぐる、研究交流や政策提言などで協力関係を深めていくことが主たる目的で、白鶴淳(ペク・ハクスン)所長、李勉雨(イ・ミョンウ)副所長らの歓待を受けた。

世宗研究所の設立は1983年。韓国の安全保障と南北統一に関連する研究に加え、韓国の対外関係に必要な研究と教育・研修を行ってきた。ソウル郊外にある厳かな雰囲気と同研究所の建物に着くと、日本語が堪能な李副所長が出迎えてくれ、白所長の部屋に案内された。

RECNAが北東アジア非核化のための国際ネットワークづくりや政策提言を重ねてきた経緯等を説明すると、白所長は「2018年に南北首脳会談、米朝首脳会談が開催されたことで、朝鮮半島の状況は大きく変わるかも知れない情勢になってきた」「RECNAが重視している北東アジアの非核化についても、今後、研究に力を入れていく必要があると考えている」と応

じてくれた。

その後、李副所長から、世宗研究所の組織概要や研究、教育・研修プログラムについて説明してもらった。研究所内には日本研究センターもあり、専門性の高い分析が続けられていることが印象的だった。最後に、白所長、李副所長のほか、安全保障や北朝鮮問題等の専門家も加わって、北東アジアの非核化に関する意見交換を行った。

訪問時の白所長との対話や、帰国後のメールによるやりとりの中で、2019年度の前半に、RECNAと世宗研究所の共催で国際的な専門家会合をソウルで開催し、議論の成果を発信していくことで基本合意した。RECNAは国立ソウル大学校等との交流も継続していく方針だが、国際社会への発信機能の強化という面では、世宗研究所との新たなパートナーシップも大切な一歩である。まずは今年の専門家会合をより実りあるものにするべく、協力関係を強めていきたい。

(よしだ ふみひこ、RECNA副センター長)

核兵器廃絶 地球市民集会ナガサキ

地球市民集会分科会3:

Youth Union for Peace 共同代表

「次世代とつくる核なき世界」を終えて

光岡 華子

「平和活動にもっとワクワク感を」

第6回核兵器廃絶地球市民集会ナガサキの分科会3の企画運営を担当した、大学生などの若者約10名で構成されるYouth Union for Peaceのメンバーは、当日へ向けて準備を進める中で、この想いを強くしていきました。

私たちは、核兵器の問題は被爆地の問題ではなく、一人一人の問題であるという考えを持ち、日本全国の若者に核兵器

の問題に対する意識調査を行いました。1,187名から回答を得て見えてきたのは、約8割の若者が核兵器の問題に関心を示している反面、実際に活動に関わった経験のある若者は2割に留まり、「核兵器廃絶」、「平和活動」という言葉に対してネガティブなイメージを持っているということでした。その理由として、核兵器に関する問題は自分に関係ない、そもそも政治に関わることへの拒否感がある、活動に参加すると周囲から



Youth Union for Peace集合写真 2018年11月17日
 (場所:長崎市平和会館ホール 撮影:核廃絶地球市民長崎集会実行委員会)

良くない印象を持たれる、といった若者の率直な声が挙がりました。

これらの結果から、平和活動の堅苦しさや敷居の高さを払拭し、平和活動はどんな人でも関わっていいものであり、未来を変えるというワクワク感を持って取り組めるものにしていくべきではないかと考えました。もちろん、活動への想いや真面目さは必要ですが、このまま少数の人だけが関わるという構図が続くと、一人一人が考えるべき課題であるという意識が生まれにくく、特別な人だけが関わることになってしまいます。だからこそ、いろんな人と対話ができる環境をまずは作っていくことが大切なので、当日は調査結果を示した後、ディスカッションの時間を設けました。



分科会3 パネルディスカッション 2018年11月17日
 (場所:長崎市平和会館ホール 撮影:Youth Union for Peace)

会場で初めて会った人同士が一つのテーブルで意見を交わし、平和への想いや、課題をいかに克服するかの議論を行い、対話の重要性や若い世代への可能性を見出すことができたように思います。

大きな影響力のある活動だけが平和のために必要なのではなく、一人一人の行動や姿勢そのものも平和に結びつくという認識で、これから多くの若者を巻き込んでいきたいとします。

(みつおか はなこ、Youth Union for Peace共同代表)

RECNAの活動

2019年1月1日～2019年3月31日

- | | |
|--|--|
| <p>1月9日(水) ■韓国国立ソウル大学校・統一平和研究院との間の学術研究協力に関する覚書の更新にかかる調印式
場所:長崎大学RECNA会議室</p> <p>1月11日(金) ■J-PAND (Journal for Peace and Disarmament) 第1巻2号発行</p> <p>1月22日(火) ■英国シンクタンクとの軍縮ラウンドテーブル「核保有国の責任等について考える」参加(鈴木センター長、吉田副センター長)
場所:東京・日本国際問題研究所</p> <p>1月26日(土) ■平成30年度核兵器廃絶市民講座 第6回「核廃絶寸前 レイキャピク首脳会談の教訓」
講師:吉田副センター長</p> <p>2月4日(月) ■INF全廃条約消滅に関するRECNA見解発表</p> | <p>2月9日(土) ■非核の政府を求める兵庫の会総会記念講演会 講演(神戸)(鈴木センター長)</p> <p>2月18日(月) ■第4回RECNA「長崎被爆・戦後史研究会」
場所:長崎大学RECNA会議室
講師:山本 明宏氏(神戸市外国語大学准教授)
テーマ:「ポピュラー文化に描かれた長崎原爆の傷痕 —1960代の「任侠映画」を中心に—」</p> <p>2月23日(土) ■特別市民セミナー「急転する朝鮮半島情勢—北東アジアと日本の選択—」
場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
講師:陳昌洙(韓国世宗研究所日本研究センター長)</p> <p>3月7日(木) ■第10回RECNA運営委員会
場所:長崎大学RECNA会議室</p> |
|--|--|

(次ページへつづく)

RECNAの活動

2019年1月1日～2019年3月31日

3月11日(月) ～3月12日(火)	■国際会議“2019 Carnegie International Nuclear Policy Conference”参加(米国・ワシントン) (鈴木センター長、吉田副センター長)	3月23日(土) ～3月27日(水)	■Round Table on Legal Challenges for Nuclear Deterrence参加(英国・ロンドン) (広瀬副センター長)
-----------------------	--	-----------------------	--

お知らせ

平成31年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」

第1回「最前線の核軍縮議論から ～NPT準備委員会から垣間見えるもの～」
 講師：広瀬訓 (RECNA副センター長)、中村桂子 (RECNA 准教授)
 パネリスト：ナガサキ・ユース代表団第7期生 2名
 日時：2019年 5月25日(土) 13:30～15:30
 場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ

第2回「米国の核使用は日本を守るか」
 講師：吉田文彦 (RECNA副センター長)
 日時：2019年6月29日(土) 13:30～15:30
 場所：アルカスSASEBO

※受講料は無料、参加申し込み不要
 ※15:30～16:30「RECNAと語ろう」
 主催：核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

編集後記

最近の朝鮮半島情勢の狭間でRECNAの役割は何か？

全 炳徳

RECNAが主催する「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」はこの地域での核廃絶を懇願する重要な枠組みの一つである。近年、北朝鮮の核実験とその後の動きが北東アジア情勢に多大な影響を与えている中、最後の戦争被爆地・長崎の願いを背負うPSNAの活動と役割は大変大きいと言える。今後、このパネルに北朝鮮を含む朝鮮半島の情勢に詳しい人の参加が求められている。

今回、訪問・協議が叶えられた国立ソウル大学校・統一平和研究院(IPUS)、韓信大学校・平和と公共性センター(CPPI)、国立統一研究院(KINU)、北韓情報センター(NKDB)、国立外交院(KNDA)、世宗研究所(SI)などは北東アジアの平和と安全保障を考える上で重要な韓国内のパートナー機関である。今回の訪問から感じたことを以下に纏める。

第一に、RECNAへの期待は大きい。韓国内には平和と安全保障を考える機関が多いが、一般的に朝鮮半島の統一に焦点が合わされている場合が多い。特に、今の政府はその色がより濃くなっているような気がする。しかし、今回の訪問を通して議論を交わした大学や国立機関の研究者レベルからしてみれば、RECNAが提示する「北東アジア非核兵器地帯」への理解も、その必要性についても認める発言が多かった。韓国内においてRECNAの活動には一定の効果があり期待も大きいと言える。

第二に、理想と現実の狭間を通り抜ける秘策が必要であろう。国立外交院での会合で会ったある出席者からの発言が印象深い。「近年の国際会議等で議論となる、北朝鮮の非核化への可能性について、“信頼できるのか”、“真実性はあるのか”との質問が多い。しかし、その答えは“分からない”としか言えない。非核化は理想であり、信頼や真実性の疑念は現実だが、非核化が北朝鮮にとってメリットがあるのならば北朝鮮の非核化は進む可能性が高いからだ。」

現実には利益に向くものだ。RECNAが理想を提示しつつも、利益を生む秘策をパネルの議題に提示できることを願う。

(ちよん びよんどく、RECNA兼務教員(教授)、教育学部)



第7巻4号 2019年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
 〒852-8521 長崎市文教町1-14
 Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
 E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
 http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2019 長崎大学核兵器廃絶研究センター